COLUMN ドジャースと大谷家の縁

昨年ワールド・シリーズを制覇し、ペナント・レースでも２年連続MVPを獲得したロスアンゼルス・ドジャースの大谷翔平選手の目覚ましい活躍は、日米のみならず、世界中の野球ファンの血を沸かせた。メジャーリーガーとしての華々しい活躍もさることながら、普段の言動、態度やパフォーマンスなどから明るく優しい人柄が感じられたからでもあろう。

「ドジャース」をはじめ日米のプロ野球各チームには、それぞれニックネームがある。タイガース（虎）、カープ（鯉）、スワローズ（燕）、ホークス（鷹）、ライオンズ（獅子）などは、分かり易い人気の動物である。

一方、野球と並んで人気のプロサッカー Jリーグのチーム名は、よくぞ考えたなと思わせるユニークな名前ばかりで、チーム名は英語、ラテン語、スペイン語、イタリア語などを組み合わせた造語など森羅万象何でもありで、些か複雑怪奇である。サッカー自体がヨーロッパ生まれだけに、多くの言語が入り乱れている。「東京ヴェルディ」は、ポルトガル語の「Verde」（緑）を意味し、「湘南ベルマーレ」とは湘南の「美しい海」をイメージし、ラテン語のBellum（ベラム＝美しい）とMare（マーレ＝海）を組み合わせた造語である。

傑作は、「ヴァンフォーレ甲府」である。フランス語の「Vent（風）」と「Forêt（林）」を組み合わせた造語で、サッカーとは無縁の戦国の武将・武田信玄の「風林火山」を基に名付けられたというから、ヨーロッパのファンがその謂れを知ったら狐につままれることだろう。サッカーチームの愛称には、動物はあまりない。僅かに、「札幌コンサドーレ」の「コンサドーレ」が、北海道民を意味する「道産子（どさんこ）」の逆さ読みと、ラテン語の響きを持つ「-ole（オーレ）」を組み合わせた合作とは呆気にとられる。

その点では野球チームは人気のある動物ばかりなので、親しみやすく分かりやすい。だが、「ドジャース」という動物は、あまり聞いたことがない。一体どんな動物だろうか？

ドジャース（DODGERS）とは、dodge（避ける）する人という意味で、かつてニューヨーク・ブルックリン区に本拠地を置いていたブルックリン・ドジャース時代から名乗っていた伝統あるニックネームであるが、その昔下町ブルックリンは、家が建て込んで道路も狭かった。そこに路面電車が走っていて、その電車を素早く避けながら道路を渡る人を「ドジャース（電車を避ける人々）」と呼んだことがその由来である。

そう言えば、日本でも昔から小学生は皆「ドジャース」だった。よく遊んだドッジボールでは、ボールをよけてプレイした。日本に伝わった明治の末ごろは「デッドボール」と呼ばれ、「死球」ではなく「避球」と書かれた。大正時代に欧米留学から帰国した「大谷」家の大谷武一東京高師教授が、「ドッジボール」と改名した。これも「大谷」家と「ドジャース」の切っても切れない縁だろうか。

エッセイスト　近藤 節夫